

## 様式2

### 全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名： 文学と芸術

部会長名： 坂東 肇

作成者名： 坂東 肇

#### 概要（2000字）

平成22（2010）年度の教養原論科目のうち、「文学と芸術」教育部会に属する科目の教育について報告する。

「文学と芸術」教育部会には、人文学研究科8名、国際文化学研究科6名、人間発達環境学研究科10名、計24名の教員が所属し、前期12コマ（夜間1）（人文学研究科－4名、国際文化学研究科－5名、人間発達環境学研究科－2名）・後期12コマ（人文学研究科－5名、国際文化学研究科－4名、人間発達環境学研究科－2名）の共通教育授業を担当した。

その内訳は、下記の通りである。

（夜間主コースは、文学と芸術を隔年開講し、当該年度は文学科目を開講）

前期	伝統芸術－3コマ	芸術と文化－3コマ			
	言語と文化－1コマ	日本の文学－4コマ	世界の文学－1コマ		（夜間）
後期	伝統芸術－3コマ	芸術と文化－2コマ			
	言語と文化－3コマ	日本の文学－3コマ	世界の文学－1コマ		

以上のように、三つの研究科から共通教育授業担当者が出ることにより、旧教養部及び大学教育センター時代に比べて、文学・芸術系の授業科目のバリエーションが豊かになった。また、受講者人数も、制限・調整されたことによって以前より適正化され、授業によっては大教室で三百名前後の受講生を相手に講義しなければならないようなかつての教育環境は、改善されつつあるといえる。

そもそも文学や芸術の教養は、その表現世界に内在する真実の感化力によって、鋭敏でしなやかな感性を養い、自己の内奥と深く向き合うきっかけを与えてくれるものである。ゆえに、混迷の中にある現代人が心豊かに生きる力を育む糧として、文系理系にかかわらず、すべての学生にとってかけがえのない必須の教養であるといえる。それだけに、受講生にはよりよい教育環境のもとで、十分な授業理解が進む手立てを講じることが望まれる。以前より受講人数が改善されたとはいえ、いまだ受講生が百名を超える講義が多く、このような状況下で当教養教育の充実度を高めることは極めて難しい。理想的には、昨年度の当教育部会報告にも述べられている通り、さらに担当者を増やし、少人数学生を対象とする演習形式の授業なども開講できれば、一層多彩できめ細かい教養教育としての価値を高

めることができるものと思われるし、美術館・博物館見学や祭祀行事への参加などフィールド型授業ができるような環境を整えば、一層の教育効果が見込めよう。

しかし、依然厳しい現状にありながら、各授業担当教員は相応の成果を挙げている。授業内容についても、シラバスや各担当教員のアンケートから見て、昨年度同様、担当者はそれぞれの専門分野をふまえ、学生が興味を持てるようなテーマを設定し、最新の研究成果を織り交ぜながらの授業を工夫しているといえる。視聴覚機器の利用などは、殆どの教員が積極的に活用しており、DVD、CD、パワーポイント等を使う教員は多い。そして、昨年と同様にインタラクティブな課題指示を行った教員は、今年も毎授業後に学生からの熱心な質疑を受けている。また、映像や音声を多く取り入れた授業でその鑑賞と体験を重視し、ディスカッションを交えながら課題考察を行う教員もあり、さまざまな工夫で学生の授業に対する関心を高めている。ただし、教員によっては、受講者が多人数のために対話型・討論型の授業ができなかった、との回答を寄せているものもあり、やはり、授業内容および授業形態に応じた受講者人数の適正化が今後の重要な課題であることが窺える。

本年度は部会総会を年度末に開催し、新年度の部会長（部会代表）及び幹事の承認と今後の代表選出のローテーションの確認、部会構成員の異動確認等を行った。また、その後の意見交換においては、さらなる視聴覚機器の充実を望む意見や、授業の厳密な出席管理のためのシステム構築を求める意見が出された。

様式2（続き）

### 項目・観点ごとの記述

#### 基準5 教育内容及び方法

5-1-②： 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。

（観点に係る状況）なっている。

#### 根拠資料

全教員のシラバスおよび教員アンケート

5-1-③： 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

（観点に係る状況）なっている。

根拠資料

教員アンケート

5-1-⑤： 単位の実質化への配慮がなされているか。  
(観点に係る状況) ほぼなされている。

根拠資料

教員アンケート

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。(例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。)

(観点に係る状況) 文学と芸術教育部会に属する科目は受講者数が多く、講義形式の授業しか行われていない。その制限の中で、インタラクティブな課題指示や多様な情報機器・視聴覚機器を利用した授業は多くの教員が行っており、TAも活用されている。ただしTA予算は不足し、要求数の1/3以下しか配当されていない。

根拠資料

全教員のシラバスおよび教員アンケート

5-2-③： 自主学習への配慮，基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

(観点に係る状況) 組織的には行われていない。しかし、少なからぬ教員が数回の小テストを実施、課題レポートを課すなど、各自の努力・工夫による配慮をしている。

根拠資料

教員アンケート

5-3-②： 成績評価基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

(観点に係る状況) 適切に実施されている。

根拠資料

教員アンケート

## 基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等，学生からの意見聴取の結果から判断して，教育の成果や効果が上がっているか。

(観点に係る状況) ほぼ上がっているが、総合判断の結果にバラツキがあったりデータが少なすぎて判断できない、との回答もある。

根拠資料

教員アンケート

## 基準7 学生支援等

7-1-②： 学習相談，助言（例えば，オフィスアワーの設定，電子メールの活用，担任制等が考えられる。）が適切に行われているか。

(観点に係る状況) 適切に行われている。どの教員も学生からの質問に誠実に回答している。オフィスアワーや連絡先については、シラバスに記している。

根拠資料

シラバスおよび教員アンケート